

## これが 相州だるま

**表情** 凛々しい表情  
**目** 縁取りに金箔  
**頭** 渦巻き模様。  
「のし」と書いてある

**顔**  
鼻が高くて色白  
**髭**  
繊細な描き方  
**衣**  
模様が多くて  
ゴージャス



**金目だるま** インパクト大!!  
「ひげだるま」とも言い、位が高いだるま。立派な髭と険しい顔つきが特徴。目の部分に真鍮を使用するのは相州オリジナルの製法。

取材協力: お話/平塚市博物館学芸員・浜野達也さん

朱色に金をあしらった装飾とぼつりとしたフォルムが福々しいだるまサン。江戸中期ごろから諸願成就やお正月の縁起物として親しまれてきた。神奈川県内に普及しているだるまのほとんどは「相州(そうしゅう)だるま」と呼ばれるもので、最盛期には県内に10軒以上のだるま屋さんがあったが、今では平塚市の3軒のみとなっている。今回は、伝統の相州だるまを軸に、だるまの起源や製造過程、全国各地のだるまについてご紹介。実物は、現在、平塚市博物館で開催中の特別展「開運! 招福! 相州だるま」でぜひご対面を!

## & 日本全国だるま比べ

# 平塚・相州だるま

明治時代から続く縁起物



発行: 湘南新聞販売株式会社/編集: 「ふれあい朝日」編集部  
〒253-0044 茅ヶ崎市新栄町1-14 / TEL 0467-82-3618 / FAX 0467-84-0342 / 配布エリア: 茅ヶ崎市(一部除く) 藤沢市(引地川以西) 綾瀬市(一部) メール: fureai@asahi.email.ne.jp / URL: http://www.shonan-sh.jp/company/

新聞に関するすべてのお問い合わせ・ご連絡は  
**0120-033-084**  
朝日新聞カスタマーセンターへ  
受付時間: 5時~20時(日・祝17時迄)

新聞お休み・お取り置き  
のご連絡は...  
**やすみん** サービスが  
便利です!  
※通話料・通信料は発生します。  
パソコンから  
<https://www.yasumin.com/shonan/>  
携帯電話から  
右のQRコードを  
読み込んでください。  
※読み込めない場合は  
<http://www.yasumin.com/shonan/mo>  
にアクセスしてください。

藤沢でも茅ヶ崎でも、気をつけている人が、サギ被害に遭っています。7面

アロマの手作り入浴剤で  
“おうちスパ” 4面

漢字ぐるぐるパズルで  
頭の体操 6面

ご使用済みの天ぷら油  
集めます! 4面

## ~日本のだるま北から南から~



だるまの起源  
だるまは、底に粘土のおもりが付いた起き上がり小法師の一種。中国の明代(1368~1644)中期に考案された張子(木枠)や粘土の型に紙などを貼って成型の玩具・不倒翁(ふとう)が、室町時代(1338~1573)後期に日本の京都へ伝えられ、子供の姿をした小法師に作り変えられて庶民に広まった。江戸時代(1603~1868)中期に考案された張子(木枠)や粘土の型に紙などを貼って成型の玩具・不倒翁(ふとう)が、室町時代(1338~1573)後期に日本の京都へ伝えられ、子供の姿をした小法師に作り変えられて庶民に広まった。江戸時代(1603~1868)中期に考案された張子(木枠)や粘土の型に紙などを貼って成型の玩具・不倒翁(ふとう)が、室町時代(1338~1573)後期に日本の京都へ伝えられ、子供の姿をした小法師に作り変えられて庶民に広まった。

だるまの普及  
安政6(1859)年の横浜開港に伴って、生糸の輸出が始まると、関東地方の農家では、重要な収入源として養蚕を盛んに行うようになった。「蚕」

は繭を作るまでに眠って、脱皮してを4回繰り返します。それを起き上がりだるまに見立てて、蚕がよく育つようにとだるまを飾ったようです。だるまの生産地も江戸の市中から関東地方の農村部へ移り、江戸末期から明治時代にかけて、高崎、埼玉、多摩へとだるま作りの製法が伝わった。張子のだるまが西日本よりも東日本に多く見られるのは、養蚕業と結びついて広まったからである。

相州だるまのルーツ  
お隣さんと一緒に平塚にやって来た  
神奈川県内で初めてだるま製造業を創業したの

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。

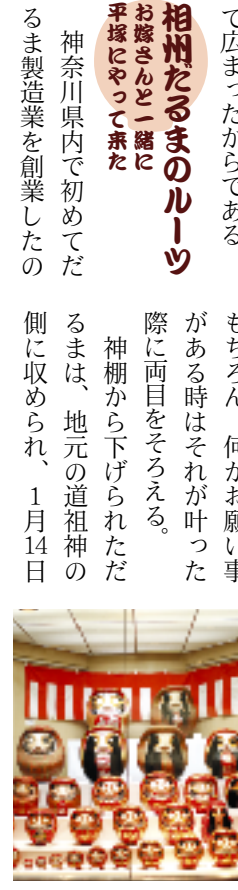
生活の中のだるま  
お正月の縁起物として  
神奈川県内では、年末にだるまを購入してお正月飾りとして神棚に飾るケースが多い。「神棚に上げる際やお札を入れ替える時に片目を入れ、1年後、下げる時に、『1年間無事に過ごせました』という気持ちを込めても片方の目を入れます」。もちろん、何かお願い事がある時はそれが叶った際に両目をそろえる。神棚から下げられただるまは、地元の道祖神の側に収められ、1月14日

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。

### 伝統のだるまづくり

- ①木型作り**  
冬に松の木を切ってだるまの形を掘り出し、1ヵ月乾燥させて使用する。
- ②張子作り**  
木型に下貼り紙を水貼りして天日乾燥させる。この上贴上貼り紙を糊で貼る。乾いたら底を丸く切り取り、張子の顔から背中、お腹に掛けて小刀やカッターで縦に切れ目を入れる。切り口にへらを入れて木型を抜き取り、和紙で継ぎ貼りする。張子の底にシリと呼ぶ円盤形のおもりをつける。
- ③色塗り**  
塗料の原料は膠(にかわ=獣の骨や皮を煮て固めたもの)と胡粉(ごふん=貝殻を砕いた白い粉)、シルクスカーレット(明治時代に輸入された赤い染料)。下塗り、上塗り、顔塗りの順序で刷毛で塗っていく。
- ④顔描き**  
目や口、眉、髭を描き、目の周りには金箔を振りかける。衣となる赤い部分に金模様を描く。

※①②の行程は、現在は紙を溶かした水槽に、だるまの金型を沈めて作る真空成型という方法に変わっている。③はラッカーに浸したり吹き付けたりする着色方法が主流。



平塚市博物館  
開運! 招福! 相州だるま  
ま◆開催中◆6日(日) 9時~17時、平塚市博物館(平塚駅北口からバス「日産車体前」美術館入口各徒歩3分) ◆入館無料 ◆平塚産の相州だるまをはじめ、全国各地のだるまも展示。6日(日)10時~13時: だるまの絵付け教室(各回先着15名参加費1000円汚れてもよい服装) ◆問合せTEL 0463(33) 5111

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。

は、現在も残る「本家長嶋達磨店」(平塚市四之宮)。当初は、現・武蔵村山市岸の伊勢屋というだるま屋さんから仕入れただるまを飯泉観音(小田原市)の歳の市などで売っていた。やがて伊勢屋と縁のあった乙幡(おっぱた)クニさんを嫁に迎えたことがきっかけで、長嶋家へ製法がもたらされ、相模のだるま作りが始まったと言われる。